

牧畜村落の生業形態の変化とオボー祭祀

—内モンゴルの牧畜村落モガイト・ガチャの事例を中心に—

神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員 白莉莉

キーワード：牧畜生業 オボー祭祀 持続 変遷

I、問題の提起

内モンゴルの牧畜地域において1980年代の初期から牧草地を世帯単位で管理する生産請負制度が実施され、各世帯の利用できる放牧範囲を鉄線で囲むような牧場の分配は行われた。したがってこれらの牧畜地域において定住を基礎とした牧畜生業が営まれるようになり、2000年になって基本的に定着した。新型牧畜生業形態の定着とそれに伴う生活様式の変貌にしたがって、伝統的な民俗文化も多様な変化を見せながら再生されつつある。本稿では、オトク地域のモガイト・ガチャ(図1)を事例に、現在営まれている牧畜生業の実態を取り上げ、生業形態の変化に伴い牧畜儀礼の一環としてのオボー祭祀活動の再生と伝承実態について検討することを試みる。

II、先行研究

近年、内モンゴルの各地において伝統文化の再活性化を目指して、政府側が巨資を持って伝統的な祭祀活動を復活させる動きがみられる。牧畜地域においては毎年の夏の時期に行われるオボー祭祀は、地方の政府に伝統文化復活の誘導対象とみなされ、「オボー文化節」などの催し物まで開催し、民族の特色ある伝統文化を以て地域の知名度を高め、観光業を発展させることに努めようとしている。

したがって、モンゴル族の伝統文化の研究に関心を注いできた研究者たちは、前となく勢いで復活されつつあるオボー祭祀活動により注目し、多様な研究視点で検討し、一定の成果を挙げている。しかし、多くの研究では、オボー祭祀活動を牧畜儀礼の一環として位置付けながら、時代的な特徴に富み、公的色彩を帯びた規模の大きなオボー祭祀の儀礼研究に焦点を当て、それを以てオボー祭祀の伝承にアプローチしようとしてきた。そこで牧畜生業の変化の視点からオボー祭祀の持続と変遷に対する研究はほとんど見られない状態である。

III、新たに形成された牧畜生業形態

① 牧畜村落—モガイト・ガチャ

モガイト・ガチャは、昔から牧畜生業を営んできた村であり、牧畜地域が遊牧型の生業形態から定住型の生業形態へと転換する過程で形成された村である。そこは、他地域の村と同様に村という行政組織の名称を名乗っているが、村落のあり方としては、牧畜地域の特徴を具えた村と見ることができる。

モガイト・ガチャは、現在、オトク前旗の旗政府所在地のオラジャチ鎮から約 72km 離れた

ナンソ(昂素)鎮に所属する牧畜村落である。村の面積は37万haで、実際に利用可能な面積は26万haである。村には6個の牧業社が設けられており、168戸の世帯、578人の人口を有している。そのうち、モンゴル族は62.5%近くを占めており、モンゴル族を主体とした村である。1980年代から始まった牧場の生産請負制度により、現在モガイト・ガチャでは牧民一世帯がおよそ1,000~6,000haの牧場を所有しており、各世帯の牧場はそれぞれ鉄線で囲まれている。牧民たちはこの鉄線で囲まれた牧場の中に固定式の家を建てて暮らしている(写真1)。

② モガイト・ガチャの生業形態

(1) 定住型の放牧生業

モガイト・ガチャの牧民たちは主にヒツジやヤギなどの小型家畜の群れの放牧に頼って生活を営んでいる。各世帯の牧場は全体的に有刺鉄線で囲まれており、家畜は其中で放牧される。

▲牧場の中には、一部の牧草地を鉄線や灌木の枝で囲んだ場所があり、普段は家畜の立ち入りを禁止し、その中の植物の成長を確保している。このように保護された小さな牧草地を、「エベソン・フレー(草畑、草庫侖)」と言う。草畑では、そのまま植物を生やして、秋になると植物を収穫し、冬と春の間の家畜の餌にする。

▲草畑の中で自然に生える植物以外にも、数十haのトウモロコシなどの畑を作り、収穫物を家畜の餌とする。近年、政府は牧民たちにトウモロコシの畑以外にも少量の野菜畑を作り、日頃の野菜を自給することを提唱している(図2)。

※普段、家畜の群れは草畑以外の牧場において自由に放牧されるが、この牧場においてもその基本的な植生を保つために、草が生える春の季節、つまり4月から6月にかけての時期が強制的に「休牧期」として定められている。この時期は家畜の群れの放牧が禁止され、家畜は小屋に閉じ込められ、餌での飼育が行なわれる。この季節の餌は、前年度に得られた草畑の植物やトウモロコシの収穫などによって確保されるのである。

近年のモガイト・ガチャにおいては、冬から春にかけての家畜の餌を確保するために、牧場の植生が芳しくない世帯が、政府の援助を申し込むか、自ら投資して草畑で機械を使ってハルガナやトルログなどの家畜に栄養性の高い灌木性植物を植える現象もたびたび見られるようになった(写真2)。

(2)「退牧還草」

▲舎内養殖

近年、モガイト・ガチャにおいては、村の生態環境の衰弱と牧民の収入状況の低い現状に基づき、「生態を回復し、人口を転移し、舎内養殖を支持する」政策を確立している。村の党支部は積極的に国家の投資プロジェクトを獲得し、16万haの「退牧還草」のプロジェクトを実施し、64戸、234人に影響を及ぼしたという。「退牧還草」項目において、灌木性植物を人工的に植えることによって牧場の改良を目指し、飼料基地の改善と、舎内養殖を進行させ、生態環境の回復を促進している(写真3)。

▲5年制禁牧

「退牧還草」のプロジェクトに関わった牧民の世帯は、牧場の砂漠化の実態により「生態を回復し、人口を転移する」政策の対象者として、2002年から5年制の禁牧が実施され、2012の時点でちょうど10年目となる。これらの世帯は、普段住処に住むことは許可されるが、原則上家畜の飼養は一切許されない。

禁牧政策の最初の段階において、禁牧対象となった牧民の世帯は毎年政府から一定の生活費を獲得していたため、家畜の放牧を放棄し、近くの町で単純な商売を営むようになった人たちもいるが、出稼ぎに適合しない年配の牧民たちは近隣や親戚の牧場を借りて小量な家畜の放牧を維持してきた。モガイト・ガチャにおいて、この政策により青年労働者は出稼ぎで収入を保持するためにすでに120人は転移している。

(3)出稼ぎ

禁牧政策の対象となって出稼ぎに出た牧民と比べて、禁牧対象となっていない牧民の世帯も家計を補助するために放牧を行いながら臨時出稼ぎに出ている現象が多い。過剰放牧を防止するために、強制的に家畜の数が制限され、日常的な生業は二人ぐらいの労働力で回され、残りの労働力は地方の開発プロジェクトによる交通の建設や地下資源開発などの各種の工事が行なわれている場所で働くようになっている。家庭に残り、実際に家畜の放牧を維持しているのは、基本的に年寄の夫婦二人となり、余剰な若い労働力は不安定な出稼ぎに従事するようになっている。

IV、近年のオボー祭祀活動

オボーとは、牧畜民は自分たちの暮らすそれぞれの地域において、土地の神の依り代として神聖視される崇高な山岳や河といった自然景観が荘厳な場所を選定し、そこに石や土、灌木などを積み重ねた造営物であり、牧畜民は毎年定期的に、オボーに対して祭祀を行なう。オボーは本来的には、万物に神霊が付いているというモンゴル人の自然観から発生したものである。そのため、オボーの造営に際しては主に自然の石を積み重ねたもの、または灌木を束ねたものが用いられてきたが、近年では、レンガやセメントなど現代的な建築の材料を使用し、豪華に改築される例も多く見られるようになった(写真4, 5)。

オボー祭祀は各土地の共同体の繁栄、家畜の繁殖などを祈願する宗教的行事としての性格を持っており、牧畜生業において収穫の季節とみなされる夏から秋の時期に行われる。祭祀の際に、牧畜民は羊や山羊、牛馬などの家畜、あるいははその肉、乳製品などを供え、五畜の豊饒、無病息災、その他が祈願する。また、オボー祭祀においては、競馬やモンゴル相撲など伝統的な技能が奉納されることがほとんどである。

伝統的な遊牧社会において、オボー祭祀は単に神々を祭る場所としての意味を持つだけでなく、遊牧社会の政治、社会、軍事などと密接に関わる集会としての役割をも持ってきた。

▲オボー祭祀の場において、地域共同体の生業と関わって発生した揉め事について協議し、共同体の構成員同士の社会関係を調整する公的な行事が行われる。

▲オボー祭祀に付随する競馬を通して、家畜を調教するための牧畜民の知恵が披露され、各

地から品質のよい馬を選抜し、それを軍事的に使用することも考えられてきた。

▲オボー祭祀の相撲場はモンゴルの力士たちが体を鍛えた結果を披露する舞台でもあり、厳しい自然環境や社会環境と闘うモンゴルの英雄を輩出する機会ともなる。

つまり、オボー祭祀は、自然と人と家畜が一体化した遊牧社会の固有の祭祀習俗であり続けてきたことを意味する。近年、定住型の牧畜生業が定着するに伴って、牧畜村落に行われるオボー祭祀活動は伝統を引き継ぎながら様々な変遷を辿っている。

① 祭祀主宰組織の特徴

以下でモガイト・ガチャのイケ・チャイダム・オボーの事例を中心にオボー祭祀組織の特徴を見てみる。イケ・ツァイダム・オボーの場合、景観的には、オボーを中心に、東南、西南、西北、北の方角に 4～5km 離れた所に、それぞれラシニマの長男のノルブの家、二男のシラホの家、三男のセンゲの家、四男のバヤン・チョットの家が建ち、オボーは四人の兄弟の家に囲まれている状況である。長男のノルブの話によると、上の三世代からこの地域に住み、家族は昔からイケ・ツァイダム・オボー祭祀の主宰を担当してきた。

イケ・ツァイダム・オボーは 1980 年代の半ばまで、モガイト・ガチャの牧民のラシニマとダルマたちがオボーの主宰を担当したという。その後、主宰者のラシニマはオボーの主宰職を彼の長男のノルブ、そしてオボーの近くに住んでいるジラントッタホに譲った。主宰職を受け継いだノルブとジラントッタホは、子供の頃からモンゴル語とチベット語を勉強した経歴を持ち、当時地方では文字の読み書きができる文人たちである。特にノルブは、1950 年代に地方の小学校の教師を務めたことがあったのだが、文化大革命で「富牧」の後裔として教師の資格を失ったという。2 人の主宰者はいずれも、上の世代からこの地域に暮らしてきた人たちであり、モガイト・ガチャの形成期に関わっていた世帯の子孫である。

1988 年にイケ・ツァイダム・オボーは新しい祭祀場を建立し、主宰者のメンバーはノルブの 3 人の兄弟と 1 人の漢民族を加えて、計 7 人のグループとなった。つまり、現在のオボーの主宰者グループは、ラシニマの 4 人の息子と、上の世代からこの土地で暮らしてきたというジラントッタホ、ダルマ 2 人、地方政府の要請を受けて「民族分裂主義」を避けるために加えた漢民族の 1 人によって構成されている。

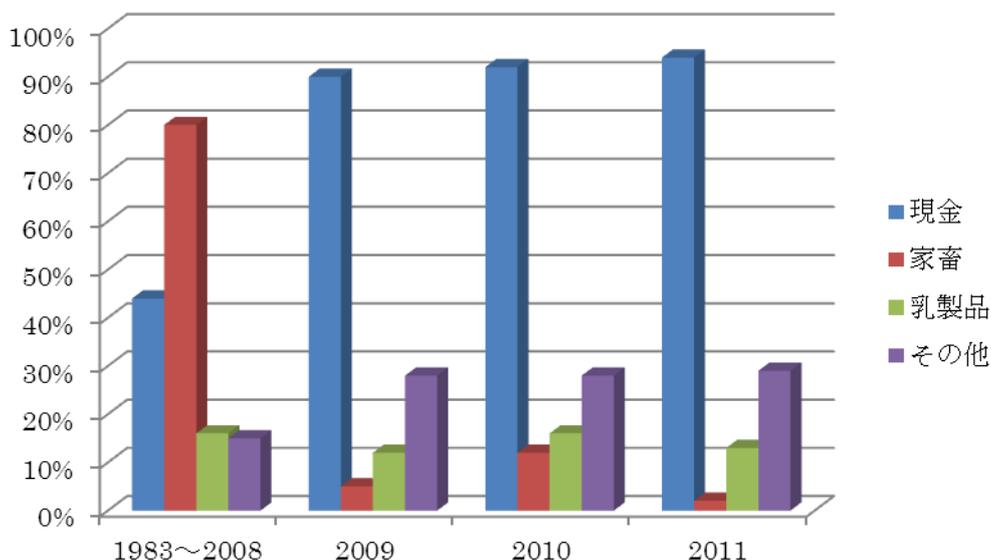
また 2013 年は、文化大革命後のオボーの復活から 30 周年であり、それをきっかけにオボーの主宰者グループは次の世代の新しいメンバーに交替することになった。新しい構成員は、ラシニマ系からノルブの長男のビリゲト(40 代)、バヤン・チョットの次男のナソンバト(30 代)、ラシニマの世代からこの土地で暮らしてきた世帯の子孫 2 人を加えて 4 人とする事になっている(図 3)。

要するに、1980 年代から現在まで、イケ・ツァイダム・オボーは三代の主宰者組織の交替を行うことになるが、主宰者組織は、最初のオボーの近くに放牧していた地縁集団のメンバーから、現在のオボーを囲んで定住している血縁集団が主体メンバーを成すようになっていることが伺える。

② 供物の変化

オボーに捧げる伝統的な供物は主に家畜と羊、山羊の丸煮とアイラク(酸乳)、チーズ、バ

表 1:モガイト・ガチャのイケ・ツアイダム・オボーの供物の変化 オボー祭祀の主宰者グループで会計を務めるダルマ氏の自宅で保管している近年のオボーの収支計算表により筆者が作成したもの。



ターなどの乳製品、また酒やレンガ茶など牧畜民が日常的に好む飲食物が中心である。しかし近年、オボーの供物は、伝統的供物から金銭を奉納するものへと劇的に変化している【表 1】。

表 1 はモガイト・ガチャの近年の供物の変化を表したものである。イケ・ツアイダム・オボーの奉納記録によると、1983 年から 2008 年まではオボーに家畜とその丸煮を奉納した世帯が 80%以上を占めたが、2009 年以降、伝統的な奉納物は急激に下がり、代わりに金銭を奉納する世帯の比率が 90%を上回っている。

定住型の放牧生業形態の定着と禁牧政策による家畜の減少により、牧民たちの日常的な飲食における肉食の量も顕著に変わっている。また、近年の市場経済の発展により家畜の価格が高騰することによって、牧民たちが家畜の市場販売により収入を得ようとする価値観の変化と密接に関わっていると思われる。近年実施されている禁牧政策により、オトク地域の牧民の家畜の数は、以前と比べて約半分にまで減少している。また、市場経済の発展により、家畜の値段は年々高騰しており、牧民たちは家畜の販売で金銭収入を獲得するための主な源としている。このような祭りの供物の変化により、祭祀日の会食にも影響が見られるようになっている。2008 年の時点では、イケ・ツアイダム・オボーにおいて参拝者が集まった時から祭祀が終わるまでの間中、参拝者のもてなしのために主に肉とお茶などが出されたが、現在は会食の前にお菓子とお茶が用意され、会食の際には肉と野菜スープによるもてなしへと変わっている。

③ 祭祀活動に伴う競馬の実態

オボー祭祀の際に、競馬の選手たちは馬を牽いてオボーの前に跪いて参拝するか、馬

に乗ったままオボーを時計回りに回ってからスタートラインに向かう。競馬の距離はオボー祭祀の規模により、通常は5~15kmの距離となっている。競馬のスタートラインは、オボーより南の方に定められ、競馬の選手たちはオボーの方向、つまり北に向かって走る。それはオボー祭祀の季節に南から風が起きると雨が降るとい説によって生まれた習俗であると言われている。

定住型の放牧生業により、草原における馬やラクダなどの大型家畜が急速に消えている。オトク地域においてすでに1970年代から大型家畜は草原を破壊する存在とされ、政府によって強制的に放牧が禁止されるようになったのだという。鉄線で囲まれるようになった牧場は空間的に見ても、昔のような大型家畜の群れの生存に適さない環境であることも原因の一つである。現在、モガイト・ガチャのオボー祭祀の際に、競馬の参加者はほんの4~5人しか見られなくなっている。

一方、近年地方では一部の牧民たちは、競馬のウマを飼育することに専念し、毎年のおボー祭祀などにおいて競馬の競技を持って、経済的な利益を獲得している人たちもみられる。このような人たちが集まって「馬術協会」という民間組織を形成している現象もあり、会員は皆、もともと馬が好きで、馬の飼育に興味を持つ人たちである。オトク地域において、このような「馬術協会」のメンバーたちは、近年内モンゴル自治区乃至自治区以外で行われる競馬競技などに活躍するようになり、競技により成績を確保するために、ロシアなどの外国から高額でよい品種の馬を輸入する現象もしばしばみられるようになった。要するに、草原において保持されてきた伝統的な馬文化が、馬を飼育して、競馬に出場させるという文脈の中で、再活性化されていることが伺えるのである。

V 結論

本稿において、定住型の牧畜生業形態の定着に伴い、牧畜村落におけるオボー祭祀活動に如何なる変化をもたらしたかの問題を中心に検討してきた。特に、今までの研究においてほとんど取り上げられてこなかった牧畜村落のオボー祭祀活動を担ってきた主宰者組織の形成とその特徴、最も牧民たちの価値観を表す供物の変化、またモンゴル草原の歴史と密接につながる馬文化の劇的な変化などの問題に焦点を置くことにした。

牧畜村落のオボー祭祀習俗において、上記の民俗変遷の現象以外に、祭祀儀礼の流れなどが昔のまま継承されている。オボー祭祀儀礼に、モンゴル人が昔から篤い信仰を持つチベット仏教が関わり、(1)供物の浄化儀礼；(2)供物を捧げる儀礼；(3)招福儀礼などの祭祀儀礼の諸過程にラマ僧の読経が付くものであり、それが今日も変わりなく引き継がれている。また、オボー祭祀活動において、伝統的な競技に競馬以外にモンゴル相撲も行われる。モンゴル相撲は伝統的なモンゴル社会において、英雄を輩出する主要舞台となっていたが、科学知識を重んじる時代において、牧畜村落の相撲取りも人々の気軽な娯楽となっている。

近年、市場経済の発展により、地方の人々の生活意識も徐々に変化している。牧民たちの中では、オボー祭祀の日に臨時商業に従事する人たちも現れ、祭祀場の近くで飲み物やお

菓子などの単純な商品を販売したり、簡単な食事を提供する飲食店を開く現象もみられるようになった。定住型の生業形態の定着と生態環境の保護政策などにより、牧畜民は自由に家畜の放牧ができなくなり、生計維持のために臨時出稼ぎや臨時商売など様々な仕事に従事するようになり、それに伴い時代に応じた意識観念も芽生えてくることが想定される。

VI参考文献

ボルジギン・オルトナスト

2007 『オボー祭祀—ウジムチン地域の祭祀文化に関する文化人類学的研究—』

学位論文 千葉大学社会文化科学研究科

ナランビリゲ

2010 『モンゴル族のオボー祭祀—内モンゴル・オトク前旗の事例にみる民族帰属意識・文化継続・現代化—』 学位論文 神奈川大学歴史民俗資料学研究科

白莉莉

2012 「牧畜村落におけるオボー祭祀の復活及び祭祀儀礼の再考」

『年報 非文字資料研究』 vol.8 pp.295-311

2012 「オボー民俗の景観的変容—2011年オトク地域における調査事例を中心に—」

『比較民俗研究』 vol.27 pp.145-161

2013 『モンゴル族のオボー信仰の持続と変遷—内モンゴル・オトク地域の事例研究を中心に—』 学位論文 神奈川大学歴史民俗資料学研究科